# 校外施設の活用に関する研究(1)

東京学芸大学附属高等学校　岩藤英司
坂井英夫
松本至巨
祖慶良謙
安井　崇
佐藤健太

## 目　　次

1．研究の概要
1．1．研究の目的…… 184
1．2．研究期間…… 184
1．3．研究の内容と計画…… 184

2．今年度の研究成果
2．1．本校における校外施設の利用の経緯……185
2．1．1．妙高寮の歴史…… 185
2．1．2．親睦旅行…… 190
2．2．他校対象の調査 …… 191

3．おわりに…… 191

資料1　校外施設(学校寮)関するアンケート…… 193

# 校外施設の活用に関する研究(1)

東京学芸大学附属高等学校　岩藤英司
坂井英夫
松本至巨
祖慶良謙
安井　崇
佐藤健太

## 1．研究の概要

現行の学習指導要領に即したカリキュラムの下、全国の小学校、中学校、高等学校において、総合的な学習の時間や校外学習などで校外に出かける機会が多くなった。校外で学習することの意義は、実体験を通じて、教室の座学では決して得ることのできない貴重なものの見方や考え方を生徒が獲得できることにある。そこでの学習が1つのきっかけとなって、新たな興味関心が喚起され、将来の学習への取り組みをより活性化させる要因となる場合も少なくない。

生徒にとっては、校外でさまざまなものに触れることは大変貴重な機会であり、より校外学習の機会を増やして経験を少しでも多く積ませたいのは言うまでもないことであるが、実施する教員の立場に立ってみると、その実施にあたっては、多くの困難が生じるためその実施は容易ではない場合も見受けられる。

そのような中において、いろいろないきさつで昔から校外施設を所有しそれを活用して校外学習などを実施して来ている学校が幾つかみられる。

本校においても、新潟県妙高市に、本校独自の教育施設を所有して半世紀近くが経過している。これまで、スキー学校、林間学校、合宿や保護者教職員の親睦旅行などに活用してきた。

そこでこのたび、本校の歴史や他校の状況の調査や地域社会への貢献との関連などについて、総合的に校外施設の活用に関する研究を行なうこととした。これが、本校の施設活用の一助となれば幸いである。

以下にその研究計画の概要を示す。

### 1．1．研究の目的

本研究の目的を次のように設定した。

(1) 高等学校の教育活動において校外施設が果たすべき役割について検討し追究する。

(2) 高等学校における教育目標達成のための校外施設の活用方法を考案し試行検討する。

(3) 本校における妙高教育施設について、(1)、(2) を含みその在り方、意義を追究する。

### 1．2．研究期間

本研究は、その目的や対象を考えると、今年度1年だけでは、研究できる範囲が非常に限られたものになることが十分予想できた。そこで、本年はじっくりと計画を立案し、本研究をはじめたことを広くアピールし協力を求めることを主眼におき、今後、平成23年度までの6か年にわたって、時代に即して広く調査・研究を推し進めることとした。なお、研究の期間が長期にわたるため、途中で年度が変わる際などに研究委員の交代があり得ると考えている。

### 1．3．研究の内容と計画

研究計画を次のように策定した。字数制限の関係で詳細は別に譲り、ここでは項目のみ列挙する。

(1) 過去の研究やこれまでの施設利用形態の経緯に関する研究

校外施設の活用に関する過去の文献調査、本校の施設および他校の施設に関する利用状況について調査する。

(2) 聞き取り調査

①本校関係者を対象に、妙高教育施設の意義、問題点、改善点などに関する聞き取り調査を実施し、今後のあり方について考察する基礎資料づくりを行う。

②本校関係者以外の施設利用者を対象に、妙高教育施設の意義、問題点、改善点などに関する聞き取り調査を実施し、今後のあり方について考察する基礎資料づくりを行う。

③本校以外の高校で校外施設を所有し利用している団体に、施設の意義、問題点、改善点などに関する聞き取り調査を実施し、今後のあり方について考察する基礎資料づくりを行う。

(3) 附属高校関係者対象とした研究

①附属高校生を対象とした研究

①-1 学年による活用方法

①-2 クラブ委員会活動による活用方法

①-3 各教科科目による活用方法

②卒業生（同窓会など）を対象とした活用研究

③保護者を対象とした活用研究

＊種々の講座の設定

(4) 校外施設を活用した社会貢献に関する研究

①地元（妙高市、上越市ほか）を対象とした活用研究

②教育関係者を対象とした活用研究

③一般生徒、児童を対象とした活用研究

④一般社会人を対象とした活用研究

（「研究の概要」文責：岩藤　英司）

## 2. 今年度の研究成果

### 2. 1. 本校における校外施設の利用の経緯

#### 2. 1. 1. 妙高寮の歴史

妙高寮（正式名称は妙高教育研究所）の設立の経緯やこれまでの歩みについては、本校がこれまでにまとめてきた、『二十年の歩み』(1974 年)、『三十年の歩み』(1984年)、『四十年の歩み』(1994年)、『五十年の歩み』(2004年）の中で説明されている。しかし、妙高寮をはじめとする校外施設のあり方について考察しようとする本研究の始めに改めて歴史を振り返っておくことは、やはり必要なので、屋上屋を架すことになる憾みはあるが、妙高寮の歴史、特に多大な労力と経費をかけてあえて校外施設の建設に踏み切った設立当初の経緯と、その後の施設整備と利用の変遷について最小限の整理をしておきたい。なお、本章の記述は上記の記念誌類に依拠しているが、煩雑になるので原則として注は省略する。

(1) 妙高寮設立以前の宿泊校外行事

本校では創立当初から校外の施設に宿泊して団体生活をする行事は盛んに行われていた。現在妙高寮を利用して行われている行事に関連するもので、早い時期から実施されているものとしては、1954年から林間・臨海学校、1956年からスキー学校が始まっている。妙高寮の利用が始まる 1967年度以前のそれらの行事の実施状況は、表 1 の通りである。

林間学校の目的は「団体生活の経験とその楽しさを味わい、生徒相互の人間関係を豊かにする。自然の中で学習活動をおこなう。」とされているが、参加人数や日程等委細については現時点では調査不十分のためよく分からない。スキー学校の目的は「スキーの基礎訓練および団体生活の経験」とされており、参加人数はこの表の時期

には50～60名程度だったようである。いずれにしても、本校では妙高寮の設立以前から校外の施設に宿泊する行事が活発に行われており、生徒も積極的に参加していたことは間違いない。こうしたことが、校外施設の建設が企画される前提になったのではないかと思われる。

(2) 妙高寮の設立と施設の変遷

本校の設立とともに発足したPTA泰山会は、本校の歩みと併行して学校環境の整備に尽力してきた。竹早・深沢と分かれていた校地が統合され、設立当初の諸懸案が解決されたところで、10周年を契機として泰山会は、記念事業として校外施設を建設することを決定した。校外施設建の目的は、「現在の学校教育だけでは果たし得ない面を、校外施設の活用によって達成し、さらに学校教育そのものを盛りたてていく」こととされ、夏期林間学校や冬期スキー学校に加え、クラブ活動や学級活動での利用、さらには生徒・教職員の友人・家族の利用等が想定されていた。

**表 1 妙高寮設立前の本校の宿泊校外行事（修学旅行を除く）**

| 年（期） | 林間学校 | 臨海学校 | スキー学校 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1954(1期) | 上高地（竹早）<br>戸隠高原（深沢）<br>尾瀬・丸沼・日光（深沢） | 勝浦海岸（深沢・竹早） | | 林間・臨海学校は 1学年希望者夏期 |
| 1955(2期) | 上高地（深沢・竹早） | 勝浦海岸(深沢・竹早) | | 同上 |
| 1956(3期) | 妙高 | 勝浦海岸 | 妙高池の平 | 同上。この年はスキー学校は1・2学年合同で1月中旬(本校入試期間)。 |
| 1957(4期) | 妙高 | 岩井海岸 | 妙高池の平 | 林間・臨海学校は 1学年希望者夏期。スキー学校は1学年希望者1～2月(本校入試期間) |
| 1958(5期) | 蓼科高原 | 大瀬崎海岸 | 妙高池の平 | 同上 |
| 1959(6期) | 蓼科高原 | 戸田海岸 | 妙高池の平 | 同上 |
| 1960(7期) | 蓼科高原 | (以後、臨海学校は中止) | 妙高池の平 | 林間学校は1学年希望者夏期。スキー学校は1学年希望者1～2月(本校入試期間) |
| 1961(8期) | 蓼科高原 | | 妙高池の平 | 同上 |
| 1962(9期) | 蓼科高原 | | 妙高池の平 | 同上 |
| 1963(10期) | 蓼科高原 | | 妙高池の平 | 同上 |
| 1964(11期) | 蓼科高原 | | 越後湯沢 | 同上 |
| 1965(12期) | 蓼科高原 | | 妙高池の平 | 同上 |
| 1966(13期) | 蓼科高原 | | 妙高池の平 | 同上 |
| 1967(14期) | 妙高高原 | | 妙高池の平 | 同上 |

＊期はその年の 1年生。

＊『十年の歩み』(1964年)、前掲『二十年の歩み』による。

1965年11月に行われた本校10周年記念式典の時点では、この校外施設は群馬県水上の宝川温泉の奥地の国有林を借地して建設することが決定されていた。しかし、その後の詳細な検討の結果、自然的条件が本校の寮建設に最適ではないと判断され、この水上寮建設計画は断念された。そこで、あらためて保護者の協力も得て適地を探すことになり、1966年1月～3月にかけて、長野県小諸高峰高原・長野県青木湖周辺・長野県飯山付近、新潟県妙高山麓（池の平・赤倉・関山）等で本校教官による実地踏査が行われた。その結果、妙高山麓の関山が第一の候補地と決定された（ちなみに、この土地の情報を紹介したのは当時の泰山会理事を務めていた保護者だった）。

1966年5月、泰山会役員4名と校長・教頭・事務長が関山を踏査、同年7月には本校教官13名が現地で種々の角度から検討し、学校側の方針として関山を校外施設建設の適地とする意見が決定された。関山の地が校外施設の適地とされた理由は、

①信越線妙高高原駅・関山駅からのバスの便が良く、当時としては交通の便が良いと考えられたこと。

②夏の平均気温が26度と涼しく、冬は12月中旬から4月初旬まで積雪があり、スキーを楽しめること。

③妙高カントリークラブと水源保安林に囲まれた緑豊かな場所で、眺望も雄大であること等から、四季を通じて活用でき、教育的に良い条件が維持できる。

と考えられたためであった。

これを受けて、泰山会は校外施設建設準備委員会を設置し、建設予定地を所有していた妙高観光開発株式会社と交渉を進めた。その結果、妙高観光開発株式会社側で電気・水道・排水工事等を行った上で、坪単価2000円で用地を買い取るということで交渉がまとまり、1966年8月の泰山会常任理事会において、満場一致で買収が決定した。購入地（新潟県中頸城郡妙高村大字関山字坪岳6392番地ノ5）は面積4440.35坪（14675㎡）、購入総額は887万8000円ということになり、この費用は泰山会校外施設積立金と1966年度泰山会費の一部でまかなわれた。そして、施設の正式名称が「妙高教育研究所」と決定され、1期生吉田研介氏が設計になる建物（木造2階建、地下1階、延床面積9571.1㎡、収容人員約130名、図1参照）が1967年10月に落成、記念式典が行われた。妙高寮の本建築には3200万円、備品・付帯工事等を含めて約4000万円が予定されたが、建物自体はこの種の施設としてはがっちりした基礎工事と骨組みで作られており、建築後約40年経った今日でも耐震性等には問題がないことが確認されている。ちなみに、吉田氏が設計を担当したのは、本人からの申し出によるものであったというが（前掲『三十年の歩み』、『泰山木』19号、2002年）、これは妙高寮の設立に向けた当時の関係者の熱気を伝える象徴的なエピソードと言えよう。

妙高寮の施設・設備は毎年少しずつ整備・拡充されていったが、特に大規模で重要な施設整備としては、弓道場（弓道泰山館）・附属体育館・洗心館、そして何より坪岳スキー施設の建設がある。弓道場は1974年に竣工した。附属体育館は1978年竣工で、バスケットボール・バレーボールのコートが1面、バドミントンコート4面等の使用が可能になっている。洗心館は放送設備・視聴覚設備・音楽設備やスキー・飯盒等の備品を備えた多目的施設で、1981年に竣工した。

坪岳スキー施設だが、妙高高原はスキーの適地であるにもかかわらず、妙高寮に近接するスキー場はなく、関係者の間ではその必要性が痛感されていた。その後、妙高寮の裏山の坪岳がスキー場に好適な場所であることが明らかになったため、1971年5月の泰山会総会で坪岳にスキーリフトを建設することが決議され、スキー場の建設計画が動き始めた。リフト事業は乗客の輸送であるため、その運営には法人格が必要であったことから、1971年6月に当時の泰山会役員と一部旧役員を発起人として「妙高坪岳開発株式会社」（その後、1972年に株式会社泰山会と改称）が設立された。これを事業主体としてスキー場用地の借用、工事認可の取得、リフトの建設が進められ、1971年12月にスキー場開きが行われた。この際のリフトの工事費は約1700万円、総工費は約2200万円だった。その後、1972年・73年に大規模なゲレンデの整備が行われ、スキー場としての設備が整った。

なお、坪岳スキー設備を整備する際に設立された株式会社泰山会は、妙高寮とその付帯設備、現地の自然環境

の保全と教育活動の援助を目的としており、1972年２月には妙高寮の教育機能を強化するため、隣接する土地約2973坪を 2620万円で購入し、従来の土地と合わせて約7413坪(2450㎡)を株式会社泰山会名義として登録した。

これらの施設整備によって、次節で述べるように妙高寮の生徒利用が大きく拡大することになったが、一方で年月とともに施設・設備の老朽化や運営費用面での困難も生じてきた。近年では洗心館は使用が難しい状態になっており、附属体育館の老朽化も目につくようになってきた。また、坪岳スキー施設は運営費用面の困難もあって、1997年に閉鎖された（シフト施設の撤去が完了したのは 1999年)。

**図１　冬の妙高寮と妙高山**

(3)　妙高寮の利用状況とその変遷

前述の通り、本校では妙高寮の設置に先立って種々の宿泊行事が行われてきたが、妙高寮の完成後はここで実施されるようになり、さらに発展をとげた。

林間学校については、1968年(15 期)以降、１年生を対象に１学期終業式終了後、８月上旬にかけて２クラスずつ分かれて４泊５日で実施する形で続けられて来た。林間学校の目的は「一、自然の中で生活し、自然に対する理解を深める、二、登山を通して、自分自身の体力に挑む、三、共同生活の中で相互の親睦と全体の秩序を大切にする」とされており、本校に入学した１年生にとっては、高校生としての自覚を高めるまたとない機会になってきた。日程は天候による変更以外は大きな変化はなく、第２日の妙高山登山、第４日の黒沢池へのトレッキングを軸に、グループ行動・クラスレクリエーション・飯盒炊爨・キャンプファイヤーなどを行っている。この間、35期以降は妙高山登山のルートが変わったり、長野オリンピックに合わせて新幹線･信越道が開通してからは、往復にこれらを利用するようになったりという変化はあったが、基本的には同じ形で実施されてきた。同様の形で続けられてきたという点で、林間学校は本校におけるもっとも「伝統」ある行事と言ってよいが、2006年の林間学校第２期において落石事故を起こしてしまった。この事故については既に林間学校対策委員会が報告をまとめているが、今後のあり方については学校全体としてさらなる真剣な検討が求められている。

スキー学校も、1968年以降は１年生の希望者を対象に妙高寮で行われるようになり、スキー講習には関温泉スキー場が使われるようになった。この年は１学年８学級の体制が完成した年でもあり、折からのスキーブームも

あってこれを機にスキー学校は２期編成となり、1971年まで継続した。1972年から坪岳スキー施設が完成し、以後本校入試期間に加えて３学期期末考査後の家庭学習期間も含めて３期編成で実施されるようになり（講習は坪岳及び関温泉スキー場）、１学年の生徒のおおむね８割以上が参加するようになった。坪岳スキー施設閉鎖後は再び関温泉スキー場で講習が行われていたが、スキー場の環境の変化等により2000年から赤倉銀嶺スキー場に変更になり、2002年からは妙高寮を離れて志賀高原で実施されるようになった。これとは別に、22期生以降、２年生の希望者を対象としてスキー教室が行われてきた。これは人数も少ないが現在も妙高寮を利用し、妙高高原周辺のゲレンデで行われている。

林間学校・スキー学校の他に、前述のような施設の整備によって、妙高寮はクラブの合宿に盛んに利用されるようになった。現時点では調査が不十分なため、妙高寮を利用したクラブ合宿の実施状況を体系的に明らかにすることはできないが、本校の記念誌のうちクラブ合宿についてもっとも詳しく記述されている『三十年の歩み』によると、1974年度の時点では夏期合宿を実施したクラブは23、このうち妙高寮を利用しているクラブは３（剣道・弓道・天文）で、参加生徒数は60名に過ぎないが（弓道場はこの年に竣工している）、附属体育館が竣工した1978年度には夏期合宿を実施した22のクラブのうち、９部（男子バレーボール・男子バスケットボール・卓球・剣道・弓道・サッカー・音楽・美術・天文）が妙高寮を利用しており、合宿で妙高寮を訪れた生徒は261名にのぼった。さらに、既に洗心館も完成している1983年度には、妙高寮で夏期合宿を行ったクラブは10に達し参加生徒数は263名になった。おそらくこの頃が妙高寮を利用した合宿がもっとも多かった時期であろう。

妙高寮は本校における宿泊校外行事の積み重ねを前提に、泰山会関係者・本校教官が多くの労力を注ぎ、相当の経費を負担して完成させたものだった。「現在の学校教育だけでは果たし得ない面を、校外施設の活用によって達成し、さらに学校教育そのものを盛りたてていく」ために校外施設を作ろうという夢にかけた関係者の思いの深さには、なみなみならぬものがあっただろう。設立後も施設・設備の整備が着々と進められ、その結果、資料による確認が不十分ではあるが、1980年代からおそらく1990年代前半の頃までは、かなり多くの生徒が、林間学校・スキー学校に加えてクラブ合宿ないしはスキー教室で、在校中に異なる季節に２～５回程度妙高寮を利用するという状況になっていたと推測される。妙高寮の設立に携わった人々の思いは、こうして相当程度実現したと言ってよいだろう。

(4)　妙高寮の歴史から見た今後の課題

しかし、近年、妙高寮を生徒が利用する機会は年々減少の一途をたどっており、今やほとんどの生徒にとっては林間学校の時にしか訪れない場所になってしまっている。これには大きく２つの原因があると考えられる。１つはスキー学校が妙高寮で行われなくなったこと、もう１つは、妙高寮を合宿に利用するクラブが著しく減少したことである。スキー学校の実施場所の変更についてはスキーブームの退潮とスノーボードの普及、それによるゲレンデの状況の変化といった事情が背景にあり、また、クラブ合宿の利用の減少については、妙高寮設立当時とは異なり、より近い場所で比較的安価により便利な施設が利用できるようになってきたという事情がある。一方で、体育館をはじめとする妙高寮の付帯設備は老朽化が進んでおり、寮本体の建物は堅牢に作られているものの、種々の客室設備の面で民間業者・施設に見劣りする面が出てきていることは否めない。

しかし、だからといって妙高寮が教育施設としての役割を終えたと見るのは早計であろう。寮での集団生活の体験は、多くの生徒が代金さえ払えば希望のサービスが得られるという環境に慣れてしまっている現在だからこそ、教育的な意味があるかもしれない。妙高寮を設立し、維持・運営に当たって来た先達の思いを真摯に受け止め、これまでの経験に学びつつ、さまざまな宿泊行事を通じて生徒にどのような体験の機会を与えていくかということを根本的に考え直していくこと、それこそが、妙高寮とそこでの経験という教育的遺産を引き継いでいる私たちに求められているように思われる。本研究はそのための具体的第一歩である。

（「妙高寮の歴史」文責：安井　崇）

### 2．1．2．親睦旅行

妙高教育研究所を利用する本校の行事には、林間学校、スキー教室、部活動合宿および親睦旅行の４つがあげられる。林間学校は、毎年夏休みが始まった直後の時期に行われる１年生生徒対象の宿泊行事である。この行事は４泊５日で行われるが、妙高教育研究所の収容人数が約100名であるため、１学年８クラス約350人を１度に宿泊させることができず、２クラスずつ４回に分けて実施している。そのため当研究所が林間学校に利用されるのは17日に及ぶ。林間学校では、燕温泉（標高約1100m、当研究所から約４km）を起点に、妙高山登山および黒沢池までのハイキングをそれぞれ日帰りで行っている。また、研究所内の広場を活用して、飯盒炊爨やキャンプファイヤーを行い、生徒間の親睦を深めるのにいい機会を与えている。

スキー教室は、２年生生徒対象の行事である。以前は妙高教育研究所を利用して１年生対象のスキー学校が行われていたが、2000年度を最後に実施場所を志賀高原に移した。移転の理由として、当研究所の収容人数が小さく、200人前後の参加希望者に対応するためには複数回実施しなければならないことや、講習を行うスキー場（主に赤倉温泉スキー場）まで距離があるため自動車による輸送が必要となっていたことがあげられた。スキー教室は、以前は参加者希望者が50人以上に及んだこともあったが、近年は20人前後と少数になってきている。そのため、１度での実施が十分可能であること、スキー場までの輸送も研究所支配人運転のマイクロバスで十分対応可能であることから、現在も12月中旬～１月上旬の間に３泊程度で行われている。スキー学校との最大の相違点は専門家による講習がないことであり。スキー教室は基本的に引率教員の監視の下で班別の自由滑走の形態をとっている。また、降雪量の少ない年は、時期的に赤倉温泉スキー場の積雪量が少ないことがあり、滑走に不適切な場合はマイクロバスを使用して志賀高原付近まで移動することもある。しかし宿泊料が安価であることから、ホテルなど他の宿泊施設を利用して実施するよりも当研究所を利用することにより経費が安くなり、生徒の負担も少なくでき、経済的にも参加しやすい環境をつくることができる。

部活動の合宿にも大いに利用されてきた。以前と比較すると合宿での利用は減少する傾向にあるが、現在も卓球・男子バレーボール・弓道・天文の各部の合宿に利用されている。当研究所を合宿場所とすることにより、宿泊費や施設使用料など経費の負担が削減され、生徒にとってもスキー教室同様リーズナブルになっている。しかしながら部活動の合宿が減ってきているのは、活動するための施設に限界があると考えられる。以前合宿を行っていたサッカー部は研究所近くにあった他の企業が運営するグラウンドを利用して活動を行っていたが、企業の経費削減のためグラウンドが廃止されてしまった。男子バスケットボール部も当研究所の体育館を使用して活動を行っていたが、部員数の増加にともない練習場所等に限界がみられたため、サッカー部同様他の地域の民間の宿泊施設に合宿場所を変更した。だが、現在も合宿を実施している卓球部や男子バレーボール部は、この体育館を利用して快適に活動している。弓道部は当研究所の弓道場を利用しており、この施設は東京都内の私立大学弓道部の合宿にも毎夏利用されている。天文部は当研究所の広場を中心に活動し、毎年天体観測を行っている。このように部活動においても施設的な条件を満たしていれば、妙高教育研究所は合宿施設としても十分に活用できる施設といえよう。

親睦旅行は、春と秋の年２回実施される保護者対象の宿泊行事である。春季親睦旅行は1968(昭和43)年より実施されており、2006(平成18)年で39回に至っている。秋季親睦旅行も1970(昭和45)年より毎年行われている。この旅行は、保護者間の親睦を深めたり情報交換を行う場の提供をすることと、保護者と教員の親睦および理解を深めることを目的としている。夕食時に行われる懇親会では、夜遅くまで保護者および教員の尽きることのない教育に関する議論が行われている。保護者にとっては我が子の学校生活の様子や学習に関する情報を得るよい機会であり、教員としても保護者の意見や考えを直接聞くことのできる貴重な機会となっている。また、生徒が林間学校やスキー教室で利用・宿泊する校外施設の見学も旅行実施のねらいの１つであり、当研究所に到着後、その周囲を保護者に見学してもらうというプログラムも多数実施されてきた。

春季親睦旅行が始められた頃は、妙高教育研究所集合・解散とし、保護者の方は研究所周辺を散策したり、東京との往復の間に自分の好きな場所に自由に立ち寄っていた。1970年に始められた秋季親睦旅行では、往路となる１日目に団体行動がはじめて設定され、続いて春季親睦旅行でも１日目の団体行動が行われた。1985年からは復路である２日目にも団体行動が設定され、集合・解散が上野駅（北陸新幹線（長野新幹線）が開通した1997年10月以降は東京駅）に変更となった。表３は親睦旅行で訪れた場所・施設について、春季と秋季および１日目と２日目にわけて訪問した回数をまとめたものである。１日目の訪問先は善光寺・戸隠高原・野尻湖に集中している。これは親睦旅行が妙高教育研究所を宿泊地とすることから、鉄道から下車する長野駅と研究所の間の地域が最も立ち寄りやすいためである。正午前後に長野駅に到着するため、夕方５時頃までに妙高の研究所に着くためには寄り道はかなり限定され、長野駅と研究所の間にある著名な観光地を訪問地することが多くなっている。秋の旅行では３年生の保護者の参加が多いため、生徒の合格祈願を意識して戸隠高原の中社に立ち寄ることが多い。春は１年生の保護者の参加が多いことから、夏休みに行われる林間学校の下見も兼ねて戸隠高原の奥社や燕温泉（妙高山登山の起点）を訪れることもある。２日目の訪問地は１日目と比べ分散している。２日目は朝研究所を出発し、途中寄り道しながら夕方帰京するパターンで実施している。１日目より長い時間が確保できることから、訪問地も研究所周辺地域に限らず、新潟県の中越地方や長野県の佐久地方・安曇野地方まで幅広く分布している。細かくみてみると、春は長野市郊外の松代地区や志賀高原、上田市および小諸市付近を訪れることが多く、秋は小布施町の市街地散策とりんご狩りが多くみられる。春は信越線（北陸新幹線）沿線の比較的著名な観光地をまわる傾向がみられ、秋は紅葉など季節を楽しめるような観光地が選択されているといえよう。また、一時博物館等の見学を中心にコースを設定した時期もあったが、最近では保護者にのんびりと旅行を楽しんでもらうために、自由行動を長くとるような日程が組まれることが多くなっている。このように、親睦旅行は集合から解散まで保護者が楽しく充実した時間が送れるように毎回工夫されている。（「親睦旅行」文責：松本　至巨）

### ２．２．他校対象の調査

他校対象に、資料１のようなアンケートを実施しつつある。平成19年１月末現在の所、９校からの回答があった。これらの中には、最初から校外施設を所有していない学校も多いが、中には、現在所有をしていて今後も運営を続ける予定の学校、これまで所有していたがすでに閉鎖し所有していない学校、今後閉鎖の予定の学校などもみられた。その仔細をさらに伺うなどの研究を来年度以降推し進めるとともに、アンケートの調査母数を今後さらに増加させ、調査結果をまとめていく予定である。

## ３．おわりに

総合学習などによる校外での授業実践が、小・中・高校において行なわれる機会が多くなった昨今、その効果や意義について考えるきっかけとして本研究をはじめた。本校における校外施設のあり方を見直しながら、学校として校外施設を所有する効果について、研究計画に沿って来年度以降さらに深めていく予定である。

## 表3-a　春季親睦旅行訪問先

| 1日目 | | | 2日目 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 訪問先 | 市町村 | 回数 | 訪問先 | 市町村 | 回数 |
| 燕温泉 | 新潟県妙高市 | 3 | 弥彦神社 | 新潟市 | 2 |
| 赤倉温泉 | 新潟県妙高市 | 1 | 国上寺 | 新潟県燕市 | 1 |
| 野尻湖 | 長野県信濃町 | 3 | 寺泊 | 新潟県寺泊町 | 1 |
| 黒姫童話館 | 長野県信濃町 | 1 | 親不知ビアパーク | 新潟県糸魚川市 | 1 |
| 飯山 | 長野県飯山市 | 2 | フォッサマグナミュージアム | 新潟県糸魚川市 | 1 |
| 戸隠高原 | 長野市戸隠 | 1 | 志賀高原 | 長野県山ノ内町 | 4 |
| 善光寺 | 長野市 | 1 | 小布施市街 | 長野県小布施町 | 1 |
| 川中島古戦場 | 長野市 | 1 | 善光寺 | 長野市 | 3 |
| 真田邸 | 長野市松代長 | 2 | 川中島古戦場 | 長野市 | 3 |
| 象山神社 | 野市松代 | 1 | 松代市街 | 長野市松代 | 2 |
| | | | 真田宝物館 | 長野市松代 | 2 |
| | | | 文武学校 | 長野市松代 | 1 |
| | | | 象山記念館 | 長野市松代 | 1 |
| | | | 北野美術館 | 長野市若穂 | 1 |
| | | | 新田醸造 | 長野県坂城町 | 5 |
| | | | 菅平高原 | 長野県上田市 | 3 |
| | | | 信濃テッサン館 | 長野県上田市 | 2 |
| | | | 無言館 | 長野県上田市 | 1 |
| | | | 前山寺 | 長野県上田市 | 2 |
| | | | 上田市街 | 長野県上田市 | 2 |
| | | | 池波正太郎真田太平記館 | 長野県上田市 | 1 |
| | | | 懐古園 | 長野県小諸市 | 5 |
| | | | 藤村記念館 | 長野県小諸市 | 1 |
| | | | 栂池高原 | 長野県小谷村 | 1 |
| | | | 松本市街 | 長野県松本市 | 1 |

注）各訪問先の所属市町村については、現在のものを表示した。

## 表3-b　秋季親睦旅行訪問先

| 1日目 | | | 2日目 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 訪問先 | 市町村 | 回数 | 訪問先 | 市町村 | 回数 |
| 春日山城跡 | 新潟県上越市 | 1 | 弥彦神社 | 新潟市 | 2 |
| 高田市街 | 新潟県上越市 | 1 | 寺泊港 | 新潟県寺泊町 | 2 |
| 妙高高原 | 新潟県妙高市 | 1 | 長岡市街 | 新潟県長岡市 | 2 |
| 池の平温泉 | 新潟県妙高市 | 2 | 柏崎市街 | 新潟県柏崎市 | 1 |
| 一茶記念館 | 長野県信濃町 | 4 | 春日山城跡 | 新潟県上越市 | 1 |
| 野尻湖 | 長野県信濃町 | 21 | 高田市街 | 新潟県上越市 | 1 |
| 志賀高原 | 長野県山ノ内町 | 2 | 岩の原葡萄園 | 新潟県上越市 | 1 |
| 上林温泉 | 長野県山ノ内町 | 1 | 燕温泉 | 新潟県妙高市 | 1 |
| 地獄谷温泉 | 長野県山ノ内町 | 1 | 妙高高原 | 新潟県妙高市 | 2 |
| 高野辰之記念館 | 長野県中野市 | 1 | 池の平温泉 | 新潟県妙高市 | 1 |
| 中山晋平記念館 | 長野県中野市 | 1 | 志賀高原 | 長野県山ノ内町 | 1 |
| りんご狩り | 長野市周辺 | 2 | 中山晋平記念館 | 長野県中野市 | 1 |
| 戸隠高原 | 長野市戸隠 | 17 | 小布施市街 | 長野県小布施町 | 4 |
| 善光寺 | 長野市 | 14 | 北斎館 | 長野県小布施町 | 1 |
| 信濃美術館 | 長野市 | 1 | 須坂市街 | 長野県須坂市 | 1 |
| 川中島古戦場 | 長野市 | 2 | 世界の民俗人形博物館 | 長野県須坂市 | 1 |
| 真田邸 | 長野市松代 | 2 | 豪商の館田中本家博物館 | 長野県須坂市 | 1 |
| 真田宝物館 | 長野市松代 | 2 | りんご狩り | 長野市周辺 | 6 |
| 象山神社 | 長野市松代 | 2 | 戸隠高原 | 長野市戸隠 | 1 |
| 無言館 | 長野県上田市 | 1 | 善光寺 | 長野市 | 2 |
| 信濃デッサン館 | 長野県上田市 | 1 | 川中島古戦場 | 長野市 | 1 |
| 前山寺 | 長野県上田市 | 1 | 松代 | 長野市松代 | 1 |
| 白根山 | 群馬・長野県境 | 2 | 新田醸造 | 長野県坂城町 | 1 |
| | | | 上田城 | 長野県上田市 | 1 |
| | | | 別所温泉 | 長野県上田市 | 2 |
| | | | 海野宿 | 長野県東御市 | 1 |
| | | | 布引観音 | 長野県小諸市 | 1 |
| | | | 旧軽井沢 | 長野県軽井沢町 | 1 |
| | | | 白根山 | 群馬・長野県境 | 1 |
| | | | 白馬ジャンプ台 | 長野県白馬村 | 1 |
| | | | ちひろ美術館 | 長野県松川村 | 1 |
| | | | 大王わさび農園 | 長野県安曇野市穂高 | 2 |
| | | | 碌山美術館 | 長野県安曇野市穂高 | 1 |
| | | | 松本城 | 長野県松本市 | 2 |
| | | | 浅間温泉 | 長野県松本市 | 1 |

注）各訪問先の所属市町村については、現在のものを表示した。

【資料1】校外施設（学校寮）に関するアンケート

東京学芸大学附属高等学校妙高施設委員会では、校外施設の活用に関する研究を現在進めているところでございます。つきましては、誠に恐縮ではございますが支障のない範囲で結構ですので、以下のアンケートにお答え下さいます様、お願い申し上げます。

貴学校名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ ご記入者氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿役　職（　　）

1．校外施設（学校寮）を所有していますか？いずれかに○をつけてください。

（1）昔から所有していない　（2）かつては所有していたが、今はない　（3）現在、所有している

◎以下、上の1の質問で（2）または（3）に○をつけた方のみ回答してください。

2．校外施設（学校寮）の概要について

（1）所在地 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（2）築年数 ＿＿＿＿＿年

※かつて所有していたが、今はない（使っていない）場合は、以下の質問にもお答えください。

＿＿年～＿＿年まで所有（利用）。寮を手放した（利用しなくなった）理由…＿＿＿＿＿＿

（3）部屋数 ＿＿＿＿＿部屋、宿泊可能人数 ＿＿＿＿＿名

3．運営について（該当箇所に○をつけてください。複数回答可）

（1）管理・運営について。

①常駐の職員がいる　②非常勤の職員がいる　③校外施設（学校寮）に関わる職員はいない

（　　）人　（　　）人

（2）賃金の出所について。※（1）の質問で①、②と答えた学校のみお答えください。

①国または都道府県、市区町村　②同窓会（卒業生）　③保護者　④その他（　　）

（3）運営予算の出所について。

①国または都道府県、市区町村　②同窓会（卒業生）　③保護者　④その他（　　）

（4）運営母体について。

①学校として　②同窓会として　③その他（　　）

4．利用状況について（該当箇所に○をつけてください。複数回答可）

（1）学校行事での利用状況について。（泊数や利用団体等もご記入願います。）

①林間学校（　　泊）　②臨海学校（　　泊）　③修学旅行（　　泊）　④遠足

⑤合宿（　　泊）（クラブ名など：　　）　⑥その他（　　）

（2）その他の利用状況について。（泊数や利用形態、利用頻度等もご記入願います。）

①保護者（　　）

②同窓生（　　）

③外部（　　）

5．利用・運営における効果・メリットについて、お聞かせください。

6．利用・運営における課題・問題点について、お聞かせください。

7．その他、上記の質問以外で校外施設について、今後の見通しやお考えの点をお聞かせください。

＊どうもありがとうございました。なお、本アンケートは研究目的以外には使用致しません。